委員会報告

表紙写真の選考を終えて

学会誌企画・編集委員会

学会誌第87巻の表紙写真を募集(テーマ:農業(水利)施設・構造物とそれらに支えられた農地・地域の景観など:先人たちや現代の技術と苦労が垣間見える造形美・用の美、平成30年9月30日締切)したところ、21点の応募がありました。11月16日に審査委員会(委員長・柳本尚規東京造形大学名誉教授)を開催し、12点を選定したので、ここに報告します。

学会誌企画・編集委員会では、学会誌第88巻(2020年発行)も皆さまからの応募写真で表紙を飾ることとし、表紙写真を募集しています。

募集の趣旨および応募方法の詳細は、本誌会告(74ページ)をご覧ください。たくさんのご応募をお待ちしております。

講評

柳本 尚規(東京造形大学名誉教授)

時が経てば面白い資料になると思って捨てないでおいた展覧会の案内はがきがもう20年分以上を超えた。さすがに保管も大儀になったのでやめることにしたが、これまでの分の整理くらいはしておかなくてはと思って作業を始めてみたところ、<自然>という言葉の入った題名の作品のたいへんな多さに吃驚した。

これほど気象や大地の震えに慌てふためくことが多い昨今の状況なのに、描かれる、著される自然はそれとは別物だと言わんばかりにずっと美しいものであり続けているようなのである。それも愛でる対象として発見している美しさである。畏れを抱いてみる美しさにはとうてい至っていない感じなのだ。

私は思うのだが、風景は人間本位に愛でる対象では

ない。風景写真とか風景を描出した表現物は,発見や 予感につながる自然との交感の産物でなければならな いのではないか。

私たちは風景という概念を額縁のようにつくりだして、そのフレームに対象を当て込んで、要するに風景を矮小化してしまっているといえないだろうか。災害が起きるたびに<自然力>の深さに気づかされるが、過ぎればまたすぐ自然を優しく美しいものに祭り上げてしまうのだから。

さて今年もさまざまな農業施設の写真を見た。そしてそれらはみな抵抗や共同の記憶を記録したものだと気づかされた。自然は思いつくどんな活用も試してみてもいいよと言っているような存在。ここで写真にとらえられたさまざまな施設はそういう試行の砂粒のような痕跡。山中に屹立した施設も自然にすれば稚拙な挑戦に過ぎないかもしれない。都会の建築ラッシュには、もういい加減にしておいたらと嘲笑するような表情を浮かべているのではないかと想像するけれども、農業施設のようなものに対してはまだまだだと言われているような気がする。

素人の感想だと受け流してほしいが、今回、以下の感想文を書いていて、自分でも随分使役動詞を使っているなと気づいたことだ。思わせられる、とか想像させられるとか。これはつまり受け身の感想にならざるを得ないことを示しているのだと思う。自然との関係に苦労してきた痕跡に対して、その源である自然に受け身になるのは当たり前で、こんな奇妙な発見でホッとした次第だ。というか、感想に使役動詞を使わせる写真が、有意義なのだ、いや面白いのだと思ったことを記しとどめておきたい。

水土の知 87 (1) 53

第87巻表紙写真入選作品

1 月号



地域の大堰 (北川 孝)

新しい時代に育った人には説明が難しいが、道がまだほとんど未舗装だった頃、雨のあとのぬかるんだそこは子どもたちには格好の遊び場になったものだ。泥を棒切れで裂いて、溜まった雨水を誘導する水路をつくる。さらにまた支流をつくって、ただそんなことを面白がって遊んだ。この写真を見ていると、その頃の日々を思いだす。そして、この写真の施設の図面を描いた人はどんな時代に子どもだった人なんだろうかと想像をしてしまう。

いまはレゴ*の世代が現代建築の主流を形成しているといわれる。これからはドローンの世代によってジオラマ模型のようにはじめから全体に注意の行き届いた景観がつくられていくのかもしれない。そんなことを思うと、この写真がつむぎだすストーリーはさまざまになる。私たちはそうやって写真を読んで楽しむべきだろう。読む目の成長が新しい景観をつくり出す後押しにもなるだろうから。

2 月号



春めく, 夢と元気印の牧野台地

(江口徳郎)

雪景のように見えるビニールの U 字型囲いの一面が海だとしたら、写真中央に小さく見える「直売所」は貴重な小島の存在である。<生活>の存在感がぐっと入ってくるからであり、<生産>というものの循環性をすんなりと、その合理を理解させてくれる。とてもシンプルにして内容の豊かな写真だと思う。つくって消費されていく経済の循環を素朴にわからせてくれる。豊かさがある。

農業は自然との折り合いで成り立つ。写真の景観は、その大地自然に対して工夫する人為の例示でもある。丘陵をうねる田畑であれ山の斜面の棚田であれ、農業の風景はつねに<人>の存在を想像させて飽きさせないものだ。証だと言えるだろう。農業生産の原理とそれを守る秩序、とでも言えるシステムの合理性がこの景観によって物語られる。

3月号



200 年以上続く棚田と農山村の景観

(近田昌樹)

つよい勾配の山地を拓いてつくられる棚田では、 急な斜面の圧力に耐えられるように畔や土手の部分 を<石垣>にする。そこには城郭建築で培われた石 垣工法の技術が活かされてきたといわれる。美しい 景観の「美しい」とは、まさにこうした経験や知恵 によって生み出される合理に感心させられるという 実感がもたらす感覚のことをいうのだろう。

しかしこういう思いを写真に引き写すのは難しい。思いが強調されると逆にその思いの底の浅さが 浮き上がって見えてくるものだ。

景観をただトレースするように積み石の微細、そこをぬって続く集落道。そして番屋のような住居の姿、と愚直とも言えるような思いを脇に置いたトレース写真こそが、ひるがえって見るものの目の中で<美しさ>への感覚を立ち上げるようだと思えてくる。

実直な記録が、すぐれた表現としての評価を受けている例もたくさんあることを私たちはよく知っている。

4 月号



海へ延びる(有明干拓白石排水樋門)

(渡邉圭四郎)

一瞬、空港かと思わせる施設。滑走路とヨット ハーバーが一緒になった新しい施設の事例かとも見 えるほどだ。だがよく見ると、海に延びたトングの ようなコンクリート堤の途中に、枝のようについた 突先が気になってくる。

これは何かを海中に降ろすとか、引き揚げるための誘導路ではないかと思い始める。街中の階段のとなりにつけられたスロープを連想させて、突先の意味を探し始めてみると、この突先はトングの内側に溜まる土砂を浚渫するための機械を入れるためのスロープではないか、と目を写真の上方に移動させるわけだ。そうしてこの「空港」は圓場からの排水を担う「滑走路」のようなものだと確信する。滑走路といい水路といい、何かを導く施設は似たような格好になる。こういう用途の施設を考える人は、その思案のときに鳥の目の視点になってみることがあるのではないだろうか……。目のレッスンにはとてもいい写真の例だと楽しむことができる。

5 月号



ニヶ領用水久地円筒分水 (山嵜高洋)

コップに水を注ぐときには<表面張力>という言葉がつい思い浮かぶが、この言葉を知らないときには写真のような器の縁に盛り上がる現象をどう理解していたのだろうかなどとちいさな疑問を持ったときの自分を思いだしてしばし見とれてしまった写真**

しかし写真の分水工は溢れんばかりに水を貯める 器ではない。一定量の水を常態化させておくための 調節施設である。こうした事例は、公園の噴水装置 やインテリアデザインにも使われていて私たちの目 には親しい。

この円形の施設は、円形がもつ優しさでもって日常の中に溶け込んで見える。写した人はさらに並々とそそがれた水面に映る樹影もしっかりと楽しんでいる。水の施設は、空の青さや雲の白、撫でる風もそうだが、さまざまな自然を写す水面が魅力だ。精緻に磨き上げたレンズ鏡面のような美しさである。

6月号



夕焼けの播磨富士を眺めて一寺田池一 (合田 弘)

兵庫県からも富士山が見えるのかと驚いたが、それを疑って説明を読むとこれは「播磨富士」だ。なになに富士といってこれを別称とする山が兵庫県にはいくつかある。ちなみに、富士は関東は北茨城のあたりから太平洋岸沿いに三重、和歌山の一部からも眺められるという。

それにしてもシルエットはホンモノの富士さながら。日本にはこうした山稜が多いので各地に富士と呼ばれる山がたくさんある。富士塚という石造の模型富士だって多い。あらためて私たちの「富士信仰」に思いを馳せさせられる。と同時に、この写真の風景に何とも言えない安心感をもたらしているのが遠くに見える小さな三角錐、富士のシルエットなのだと納得がゆく成じだ。

農地の生命を守る豊かな水を、遠方の富士を要と する山稜が強固な砦となって守り見てくれているよ うな図だ。

7月号



都市の中の農地(横浜市港北ニュータウン 付近) (服部俊宏)

東京の郊外には「都市農地」とでも言える独特な 光景が見られる。

関東平野の中のゆるやかな丘陵地帯に広がる農地が多いのだが、遠くからは電車の音が騒音としてではなく人懐かしく聞こえ、鳥の声や木立をぬける風の音も同時に聞こえ、農地も他にくらべて少し自由にされている感じで、ゆっくりと大地とともに呼吸している、と、そういう感じの生産と流通のシステムとはちょっと距離を置いた感じの世界になっているのだ。

遠方には集合住宅の新しい街区が見え、それはさながら「都市農地」の背景画、銭湯の壁画のような 典型をつくっている。これが先に言った独特な光景 のゆえんである。

写真はじつにケレンがない。風景が変わってきた, 時の経過を, 静かに物語るばかりである。

10 月号



秋の山王海ダム(佐藤 健)

一目瞭然、堰堤の植栽文字がこの施設の成り立ちを教える。直裁的な視覚表示で、なるほどこうして施設の由来と意義を目に焼きつけさせる方法もあるのだと感心した。そしてさらに、こうまでして目に訴えなければならなかったほどに、この地域の水不足は深刻だったのかとも教えられる。

水不足といえば、争いである。水田に必要な水源が少ないからこそ争いが起こる。「志和の水ゲンカ」は世間にとどろいていたという。したがって〈平安〉の文字にはまずもって水争いがなくなるようにという願いが込められるようになったのだろう。由来がこんなふうに際立ってみえる施設も珍しいと思

植栽文字の堰堤の向こうには、満々と水を湛えた「平安の湖」が広がっているはず。農業施設には水利をめぐる激しい争いの鎮魂碑のような役割を果たしているものも多いことにも気づかされる。

8月号



重要文化財松尾大社神前を横切る洛西用 水路 (脇谷芳招)

この用水路の起源期は、「倭」に代わって「日本」という言葉が使われ始めた時代になるようだ。狩猟の生活から稲作技術による生活に変わる時代でもあって、それとともに共同体も変化して、家族単位からひろく土地を管理するく社会>という概念が生まれた時代。

水を導く水路は共同体の都合でしょっちゅう変えられてきたのだろうが、流れる水そのものは今に至るまで変わりなく……。まるで装飾硝子の表面のような水面に目を奪われてすーっと遠い歴史に想像をひかれる、味わいのある光景だ。水は悠久の象徴、絶え間ない変化の象徴として、言葉においても絵画などの美術表現においても代表的な隠喩の例になっているが、この用水路の水面はじつに見事にそのたとえの感じを体現している。水面の紋紋を工夫する技術者もきっとひそかにいたに違いない。流れるような滑面であったり、それ以前の古典技術による表面の定まらないものであったり、それらさまざまな肌理を通して、水流に託した先人たちの気持ちが伝わってくるようである。

11 月号



大地を守る(諫早湾干拓北部排水門)

(渡邉圭四郎)

一つの仕切りで海と池ができあがる。大地も人間の知恵にかかればまるで事務所のパーティションのように自由自在、とさえ思える光景だが、自然はたえず知恵の遙か彼方に場所を変えて悠然としてある、という実感を呼び覚ます光景でもある。

だからなおのこと、新たな棲み分け方になった <海>と<池>の中の生き物の営みも想像してみた くなる。どのような新自然が貌を見せているか。干 拓もその表裏の関係にあるダムについても、そうし た施設によって生まれる新自然への想像もたくまし く働かせたいものだ。

人の営みの刻印となるこうした施設がやがて遠い 未来に遺跡となって、いつかそれを発掘する考古学 者の目に触れるようになったとき、彼らを驚かすよ うなメッセージを潜ませられるだろうか。この美し い二つの水面を見ているとそんなことも思う。

9月号



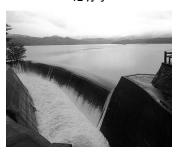
大地を育む (北川 孝)

鉄は<都市>の風景をつくった。東京も隅田川沿いに歩くと、数々の鉄橋の共演を見る思いだ。それを見ると、鉄橋の強度に注目されるだけではなく、強度に託した文化の息吹も想像できるのが楽しい。打たれた鋲のおびただしい数や、その息吹に潜む確かなるものへの憧れの気持ちも想像できる。

農地の空間を切り裂くように走る水管橋も、これはきっと実用においてばかりではなく、水路の姿によって人の気持ちを鼓舞する思想が託されているものと思えてくる。水管橋を遠くに見て田畑の仕事に打ち込んでいる人たちはどんな感じをいだいていたのか、と思わせてくる写真だ。

どんな施設も、用途から生まれたことは確かだが、それがどんなふうに見られるのかも想定されてつくられたことだろう。あるいは技術者の密やかな 含意がそこにはきっと込められているのだと思う。

12 月号



水理模型実験を経て,洪水時,その存在感 を発揮する満濃池「側溝式余水吐」

(本條忠應)

山稜の濃い影の奥の薄い影。この濃淡の差を距離に試算する方法を教わったことがあったが忘れてしまったのが残念だ。この差の表現は空気遠近法といって画像に奥行きを与える大事な技法で、写真においてもこれをどこまで微細に再現するかはフィルムの現像やブリントの際の露光量の調節によるので、撮影技術の巧拙がここでははっきりと露呈されたものだ。デジタル写真の時代になってこういう技術からは解放された感じだが、しかし自然の深遠さを描出することの難しさ、人知を超えて目の前に姿を変えてあらわれてくる自然全体の巨大性をとらえる難しさは変わらない。

満々と湛えられた池の水を、そのはしにある余水 吐から吐き落として静けさを保つという画面だが、 横たわる水、流れ落ちる水、叩きつけられる水…… と、変化に富んだ水の表情がこの写真の魅力であ る。その魅力は背後の深い奥行きからにじみ出てい るものだ。